

報告番号	※甲	第	号
------	----	---	---

主論文の要旨

論文題目 地域生活への移行を目指す精神障害者のカミングアウト意思とセルフスティグマ, 自己概念の関連について

氏名 永井邦芳

論文内容の要旨

【諸言】

我が国の精神障害者の精神保健医療福祉における長年の課題は、入院治療中心からの脱却であり、約7万人の社会的入院者の解消を目標に様々な取り組みがなされている。精神障害者に対する地域社会の受け入れを阻害する要因としては、社会が抱いている精神障害者に対するネガティブなイメージや感情がある。これらは“スティグマ”として偏見や差別を生み出し、当事者のアイデンティティを損なうことになる。また、このような偏見、差別に直面した者は、自分自身がスティグマを受けてしまう存在であると自覚することにより、自己効力感や自尊感情を損ない、社会との接触を避けようとする事が示されている。

しかし、統合失調症を始めとした精神疾患の多くは長期的に管理が必要な疾病であり、地域生活へ移行しても薬物療法や通院などを継続する必要がある、周囲の理解や支援などを得る場合にも当事者が自ら精神障害者であることを開示（以下カミングアウト）することが必要となる場合が多い。

ただし、統合失調症を始めとした精神障害者の多くは自己決定やコミュニケーションを不得手とする人が多く、まして、精神障害者に対するスティグマが解消されたとは言えない社会においてカミングアウトを意思決定することは決して容易なことではない。これまで精神障害者のカミングアウトに関する研究は数少なく、特にカミングアウトの意思に焦点を当てたものに至っては国内においてほとんど見当たらない。

そこで本研究は、精神障害者がカミングアウトに対する意思をどのように確立していくのか、そこに影響を与える要因やカミングアウトに対する意思が自己概念にどのような影響をあたえるのか検証した。

【研究の構成】

本研究の目的を達成するため2つの研究で構成した。

研究1 地域生活移行を目指す精神障害者のカミングアウト意思を確立していくプロセスについての質的研究

研究2 精神障害者のカミングアウトがセルフスティグマ及びエンパワメントに与える影響についての検討（構造方程式モデルによる統計的検証）

研究1：地域生活移行を目指す精神障害者のカミングアウト意思を確立していくプロセスについての質的研究

【研究目的】

地域の精神障害者支援施設に通所する当事者が、精神障害者であることをカミングアウトに対する意思をどのように確立していくのか、そこに影響を与える要因やカミングアウトに対する意思が自己概念にどのような影響をあたえているのかについて探索すること

【研究方法】

1. 研究デザイン：質的帰納的記述研究（半構造化面接法）
2. 研究対象者： A 県内の精神障害者リハビリテーション施設通所者 12 名
3. 研究期間： 2010 年 8 月から 11 月

【結果】

地域精神障害者支援施設に通所者のカミングアウトの意思確立のプロセスは、【自己への問い直し】，【自己の主体性の獲得】，【背中を押す力】の3つのカテゴリーで構成され、これらを構成する8つのサブカテゴリー、24の概念で構成された。

カミングアウトの意思確立のプロセスは、【自己への問い直し】という心的作業を通して自己存在と向き合い、社会との向き合うスタンスを変化させていく【自己の主体性の獲得】のプロセスであった。またそのプロセスにおいて、周囲のサポートを実感することが【背中を押す力】となっていた。

【考察】

今回の研究結果で示された【自己の主体性の獲得】は、カミングアウト意思確立プロセスの中核カテゴリーとも言える集合概念であり、カミングアウト意思の確立は、精神障害によって失われた自己の再獲得という意味を持っていると考えられた。これは精神障害者である自分をありのままに受け止め、前向きに人生をいきてこうとするものであり、リカバリー概念と一致した。【自己への問い直し】は、カミングアウトを意識してからその意思を確立していく段階で生まれる葛藤を乗り越えていく心理的なプロセスでもあり、この心的作業により得られた【自己の主体性の獲得】は、精神障害に対する否定的なイメージからの否定的な自己像である〈精神障害者である私〉から〈精神障害とともに生きる私〉への前向きな変化であり、このプロセスにおいて自分をエンパワーしていくことであった。【背中を押す力】は、〈家族の理解〉、主治医や支援施設のスタッフなどの〈信頼できる専門家〉、同じ障害を持つ〈仲間存在〉がサポートとなり、葛藤を克服し、意思確立していく力となっていた。専門職者は家族やピアがサポート源となるよう支援していく必要性についても理解しておかなければならないと考える。

研究2:精神障害者のカミングアウトがセルフスティグマ及びエンパワメントに与える影響についての検討（構造方程式モデルによる統計的検証）

【研究目的】

研究1の結果をもとにカミングアウト意思がセルフスティグマを低減させエンパワメントを

促進する仮説モデルをつくり構造方程式モデルによる検証を行うこととした。

【研究方法】

1. 研究デザイン：自記式質問紙による横断調査
2. データ分析：研究仮説についての構造方程式モデルによる推定統計分析

研究仮説

- ①カミングアウトの意思の確立を阻害する要因としてセルフスティグマが存在する。
 - ②周囲のサポート、自尊感情や自己効力感がカミングアウトの意思の確立を高める。
 - ③さらに、カミングアウトの意思を確立すること自体がエンパワメントを強化する。
3. 研究期間 2013年5月～2014年2月

【結果】

研究対象者のカミングアウトパターンについて、回答者150名中、35人(23%)が条件を問わず、自分が精神障害者であることを“常にオープンにしている”と回答しており、また“必要と判断すればオープンする”と回答した者は57人(38%)であった。一方、“できるだけ隠す”と回答した者は49人(33%)，“どんな場合でもオープンにしない”と回答した者は9人(6%)であった。疾患の違いにおいては気分障害群の方がカミングアウトに積極的な者の割合が高かった。

積極的カミングアウト群の得点が消極群に比べ有意に高かった項目として、“カミングアウトに対する肯定的意識”，“専門職サポート”，“自己効力感”であった。

ソーシャルサポートがカミングアウト意思に影響を与え、カミングアウト意思が“自己効力感”を高めるとともにセルフスティグマを低減するパスモデルを作成し、推定値及びモデル適合度を確認しながら、最適モデルを構築して検証した。本モデルの適合度は $\chi^2(87)=114.02$ $p<0.05$, GFI=.915, AGFI=.881, CFI=.967, RMR=.415, RSEM=.047であった。また推定値において、各変数からのパス係数はすべて有意であった。

モデル作成の過程においてソーシャルサポートに対する満足感によりカミングアウト意識が高まるという仮説に基づき“ソーシャルサポート”から各変数へのパスを検証した。その結果、パス係数が有意な変数は、カミングアウト肯定意識(パス係数.49, $p<.0001$)，“自立”(.47, $p<.001$)の2つであり，“セルフスティグマ”や“自己効力感”へは直接有意なパスは認められなかった。

また、カミングアウトに対する肯定意識とセルフスティグマの間に直接因果関係を示す有意なパスを引くことはできなかった。さらにカミングアウトに対する肯定意識と“自己効力感”との間のパスも有意な結果を示さなかった。これによりカミングアウトに対する肯定意識が“セルフスティグマ”，“自己効力感”に直接的な影響を及ぼす仮説は棄却された。

しかし、他の変数との関連ではカミングアウトに対する肯定意識から“楽観”へは有意なパス(.16 $p<0.05$)が認められ，“楽観”はカミングアウト肯定意識の他，“自立”からの有意なパスが認められ，“楽観”からは“自己効力感”へ(.66 $p<0.001$)，さらに“自己効力感”はセルフスティグマへ(-.26 $P<0.01$)有意なパスが認められた。

【考察】

本研究の結果、パスモデルによる検証ではソーシャルサポートの満足感が、自立性やカミングアウトに対する肯定意識を高め，“楽観”を高めることにより“自己効力感”を向上させ、セルフスティグマを低減させるモデルが見出された。日常的な関わりの中でも心理教育的アプローチを意識したソーシャルサポートを充実させることにより、カミングアウトすることの意義が見出されるとともに、地域生活への自立性や自分の将来を前向きに捉えることにつながると考える。それによりセルフスティグマを低減させる効果があることが示唆された。しかし、ソーシャルサポートには家族やピアサポートもある。これらのサポートをする側の人間もセル

フスティグマや”自己効力感”の低下を体験している可能性がある。ソーシャルサポートは相互補完的であることでより効果的になると考えられるため、専門職によるサポートは、こうした家族やピアへのサポートも十分に考慮されるべきである。

【結語】

本研究を通して以下のような知見が得られた。

1. カミングアウト意思の確立のプロセスは自分の人生を前向きに捉えなおし、主体的に生きていこうとする意志の表れであった。これはリカバリー概念に共通し、自分自身をエンパワーしていくプロセスである。

2. 仮説モデルの検証により、カミングアウトに対する肯定意識と自立意識は、”楽天”を介して”自己効力感”を高めセルフスティグマを低減させること。またソーシャルサポートに対する満足感は、カミングアウトに対する肯定意識や地域生活に対する自立意識を向上させる影響を及ぼす可能性があることが示された。